

〈研究論文〉

「満洲国」成立前後の満鉄附属地の
公学校における教育の郷土化
— 郷土科の内容と特徴に着目して —

松 婷

「満洲国」成立前後の満鉄附属地の公学校における教育の郷土化

—— 郷土科の内容と特徴に着目して ——

松 婷

はじめに

1920年代後期から1930年代初頭まで、満鉄附属地（以下、附属地）では多くの新教育思潮の研究が見られ、教育の郷土化という新しい潮流が流入してきた。教育の郷土化とは、郷土資料を用いた教育であり、海後宗臣が「教授、訓練、養護の諸部門に於て機会許す限り程度分量を越えざる限り郷土の資料を利用して之が取得理解を進め、その利用順応に習はしむる」と述べたものである⁽¹⁾。また、小澤恒一は「教育の出発が郷土の材料であると共に、教育の進み行きの一步一步が常に郷土の材料と深く結び付いて進まねばならぬ」と指摘する⁽²⁾。このような主張の下、附属地の公学校（中国人のための小学校）でも教育の郷土化を求める声が寄せられた。その結果、1934年6月には満鉄が公布した「公学校規則」において、1931年の満洲事変前に設けられた初級（小学校）3年および4年に設けられていた常識科が、郷土科と変更された。中国人児童を対象とした公学校で新しく設けられた郷土科の内容や特徴はどのようなものであったのだろうか。

満洲における中国人の郷土教育に関する研究は少ない中、槻木の研究が注目される。槻木は、（のちに日本人が満洲と呼んだ）東三省と言われる黒竜江省・吉林省・奉天省（今の遼寧省）では、日露戦争以後、多くの郷土志（日本の郷土誌）が作られたが、これらは中国の伝統的な儒教教育を超え近代的教育を作り出そうとしたものと指摘している⁽³⁾。東三省での『奉天

通志』・『承德府志』など地方的特色を帯びた郷土志については「奉天に住む人」・「承德府の人」という地域意識を植え付けるため、郷土教育は「中国という国家を創るためと言うことはできないだろう」と論じている⁽⁴⁾。この点について、日本の文部省にあたる清朝学部は、1905年に、編纂された『郷土志例目』を各省に配布し、全国各地で郷土志の編纂が盛んになった。東三省の郷土志である「遼陽州郷土志序文（二）」には「人には愛郷心と愛国心がある。郷を愛せずして国を愛するとは妄語である」ということが記されている⁽⁵⁾。清朝末期の東三省での郷土志が愛郷心から愛国心という流れを意識していたことがわかる。少なくとも東三省の郷土志編纂において、当時代にすでに「国家」という概念はあった。以上のように、先行研究では清朝末期の郷土志より愛郷心と愛国心の状況はわかるが、その後の中華民国時代を経て日本占領下での附属地、「満洲国」（以下「」は省略）に至る過程での研究はない。

そこで本研究は、満洲国成立前後に「教育の郷土化」という郷土教育の考えが提起されたことを受けて、附属地の中国人児童が学ぶ公学校での郷土科の内容と特徴を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、まず満洲国成立前後の公学校の教育の郷土化に関する議論を検討する。次に、郷土科の開設および郷土科研究部の研究活動の実際、「郷土科教授要目」の内容を分析する。以上のことから郷土科の内容と特徴を明らかにする。これらの作業を通じて、附属地における中国人児童に対する郷土教育の一端を明確にすることができよう。

1. 満鉄附属地の公学校における教育の郷土化論

最初に、附属地の教育関係者が「教育の郷土化」をどのように考えていたのかをその言説より分析する。

1931年6月の雑誌『南満教育』(105号)において、邵俊文は「満鉄公学堂教育改革に関する私見」と題する論説を書いている。この論説は元々中国語で書かれ、1930年7月の『遼寧教育雑誌』に掲載されたものである⁽⁶⁾。中国の公学堂(中国人のための小学校)の学校経営を参考にして、附属地の開原公学堂の教員である佐藤巽が日本語に訳している。この中で、公学堂の児童用教科書の選択について、邵は次のように述べている⁽⁷⁾。中華民国の新学制教科書が登場する前の旧版の教科書では、「その教材の分量重きに過ぎ児童の程度に合致せず」という問題があり、「満鉄各公学堂の学生用教科書は必ず新学制小学教科書を採用すべきだ」と主張する。ここでいう新学制の教科書とは、1922年11月に中華民国大總統令として、『学校系統改革案』を公布した後に編纂された教科書のことである。加えて、もし新学制の教科書に地方生活のニーズに合わないものがあれば「教授者に於て臨時取捨して以て地方生活に適合せしむべく考慮すべきなり」と提案している。この点は、当時の中華民国側の教育理念と関連していると推測できる。すなわち、1928年8月に中華民国教育部が公布した『中小学校課程暫定標準』では「各地方の伸縮の余地を多く残すこと」ということが求められているからである⁽⁸⁾。このように、各地方の状況に即した教育を行うことが主張された。それでは、地方生活に合わない教科書の内容を教師はどのように取捨選択すればいいのであろうか。邵は「又教材にして地方生活の需要する所にあらざるものは宜しくこれを削除すべし而してこれを補ふに児童の自然的・社会的環境中より地方生活の需要する各種事実を摘出し来り提供すれば可ならん言を換へて言はば教材は固定せるものと考へずこれを活用せしむる様力めざるべからずと言ふにあり」と述べる⁽⁹⁾。つまり、邵は教授者にとって教材は固定されたものではなく、地方生活に合致す

るものを活用できるように教授者が努力すべきだと考えている。児童が置かれている自然・社会環境を教材内容の根幹とし、地方生活に応じて変更可能であると主張する。

ここまでは中国人教師の立場からの教育の郷土化を見てきたが、では、公学校の日本人教師はどのように考えていたのか。1932年4月の『南満教育』には撫順公学校校長である荒木馨⁽¹⁰⁾が書いた言説がある。この文章は1932年4月の『南満教育』に掲載されているが、冒頭には1932年1月と記してあり、前書きに「独立新興国も近く成立の曙光を見る様になりました」と書いている。そのため、この文章は1931年の満洲事変と満洲国成立前の間に書かれていることがわかる。

中国人の公学校の教育について、荒木は、まず「不徹底に終わった過去の満洲教育」から議論を展開する。「永い過去に於て斯の如く満洲に即せざる教育が行われ来たことは、満洲に独立した古い文化がなく他の文化を取入れるより外なかつたためではあるが、又教育当事者が深慮を抜き根柢を見究めず単なる模倣に終わった結果であると信ずる」⁽¹¹⁾。加えて、荒木は満洲の環境と民族性という2つの要素から、満洲の特殊性を研究すべきだと論じる⁽¹²⁾。具体的には、環境には気候や地理的自然環境や政治、経済、産業などの要素が含まれ、民族性には人種、習慣、宗教、歴史などの要素が含まれている。荒木が主張する満洲の中国人教育とはどのようなものだろうか。荒木は篠原博士の「教育は郷土に出発して郷土に帰る」に言及する⁽¹³⁾。つまり満洲の新たな教育は郷土を根基として出発し、郷土に回帰しなければならないということであった。荒木は「満洲に即し、満洲に立脚し極めて満洲的色彩と使命を明瞭に持った教育が行われるもの」と述べている⁽¹⁴⁾。すなわち、満洲の教育は満洲の土地にもとづいて、満洲の色彩を十分に発揮させるものということである。

校長の立場の荒木の考えに対し、公学校の一般の教員はどうであろうか。1933年4月に出版された『南満教育』誌(第126号)の中で、

撫順公学校の教員である加藤嘉雄が論を述べている。加藤は1932年に満鉄教育委員会新思潮研究委員、翌年には新思想研究部委員となる人物で、教育の新思潮のことに関心があった人物である。公学校の教科目の改革について、当時加藤は「結局単なる教科名の変更に止まりその内容は旧制を脱し得ず」と主張している⁽¹⁵⁾。加藤によれば、社会の変化や思想界の変遷に伴う教育イデオロギーは、カリキュラムの改造を招来する。

「公学校教育の情勢は当時或は日本教育の模倣を余儀なくし、或は南方支那教育の直訳を必要とする事情にあったとしてこれを肯定するとしても、今日既に厳然たる満洲国の成立を見、満洲人教育の目標も明かにせられた以上、徒らなる他の模倣、直訳的教育を排し直に満洲の独自性を有する教育が生まれねばならぬことは云ふまでもなく、其のためには満洲を基調とし、満洲人に即せるカリキュラムが構成せられなければならない筈である」⁽¹⁶⁾。このように、加藤は公学校における中国人児童教育の改革に伴い、公学校での日本人教員も満洲の土地に住む満洲人（中国人）に適したカリキュラムを実施すべきだと主張していたのである。加えて、加藤はカリキュラムの内容改造よりも、さらに「本質的な規定力」を持っているのは教育イデオロギーとする⁽¹⁷⁾。加藤によれば、教育イデオロギーは二つの種類がある⁽¹⁸⁾。一つ目は、王道主義の教育であり、児童に共存共栄公正自治の精神の涵養を図る教育である。共存共栄の精神は、満洲国の建国理念の一つである民族協和と同じ意味で考えられる。この王道主義が満洲国建国後のスローガンの一つとして掲げられていたことから、公学校のカリキュラムの改造は建国理念にもとづいて主張されていたことがうかがえる。二つ目は、生産主義の教育であり、経済生活と労作愛好の精神の涵養の教育である。この流れにより、労作科の学習内容には、農業・工業などの直接生産に関する研究や、商業・交通・運輸などの経済生活に関する研究が含まれている。

それでは、この加藤の言う教育イデオロギー

はどのように教育に活かされているのか。この点について、加藤は以下のように論じる。「教育者は、此のイデオロギーを了解し、把握して児童心身の調和的発展をなさしむると同時に、それが環境に、即し且つ環境の新陳代謝を完成するカリキュラムを設定しなければならぬ、カリキュラムは百科辞典式文化、科学了解の方法的型式ではなく時代を背景とし、郷土を基調とし、児童の生活それ自体の上に立ち、後に再び児童の生活に還って、其の生活に活力を興へ、郷土を充実し、時代を伸展せしむる教育イデオロギーを最も有効に実現するためのプログラムであると思ふ」⁽¹⁹⁾。つまり公学校のカリキュラムは、単なる文化および科学の客観的状态として規定されるのではない。時代状況を背景とし、児童の生きる郷土を基礎とし、児童の生活そのものに回帰するという形で還元されている。

このように、加藤が主張する中国人公学校のカリキュラム改革は、満洲の郷土を基礎とし、児童の生活を中心に展開すべきだと主張していた。

以上、満洲国成立前後の教育関係者による教育の郷土化の主張について論じた。公学校における教育の郷土化という教育主張の提起は、当時の政治情勢の変化と結びついたものであった。次に、このような教育主張を背景にし、附属地の公学校の郷土科がどのようなものなのかを考察する。

2. 郷土科の開設及び郷土科研究部の研究活動

(1) 郷土科の開設

当時満洲国では、教育課程は、国によって作成されるものであった。満洲国の建国当初、短時間で教育課程を整備することには困難が伴った。満鉄会社は満洲国側の新学制の発表を待つて各種の資料を収集し、1933年度の公学校校長会議での答申案が確定した後、新しい「公学校規則」がだされた。1934年6月14日、満鉄の「社告第90号」にて「改正公学校規則」が公布されている。内容としては、日本語の時間を増やし、公民科を修身科に、常識科を郷土科

に変更したことである⁽²⁰⁾。郷土科の開設については、満鉄教育研究会が1934年9月に発行した『満鉄教育たより』の創刊号で言及されている。満鉄の地方部学務課長有賀庫吉が「創刊の辞」において、満洲国の成立に伴い満鉄教育界が満洲独自の自然と社会を背景に、「郷土教育の展望満鉄沿線教育俯瞰の要が起る」と述べている⁽²¹⁾。ここより満洲国建国後の郷土教育が、満鉄教育界の注目を集めていたことが読み取れる。

郷土科の要旨は、「郷土科は郷土の自然及び人文に関する卑近ナル事象を理会せしめ、兼ねて郷土を愛する精神を養ひ社会的情操を涵養スルをもって要旨とす」である⁽²²⁾。郷土科の要件として、次の2点を挙げることができる。1点目は、児童が生きている身近な環境の中で、郷土の自然や人文知識を教えることである。すなわち、郷土を直観的に教える材料とすることで、児童は身近な環境のことを理解できるようになるのである。2点目は、郷土の自然や人文的事項を理解した上で、郷土と親密な関係を結び、愛郷心の感情が生まれることである。これら郷土科の要旨は、建国前の常識科とどこが違うのか。1931年3月社告第104号における公学校の常識科の要旨は「近易ナル歴史及地理、近易ナル自然現象及児童ノ生活需要ノ大要、人身生理衛生ノ初歩」であった⁽²³⁾。常識科の要旨には「郷土」という言葉はなく、人文・自然や生活に必要な知識を理解させることに重点が置かれている。両者を比較してみると、客観的な郷土を理解することから、主観的な郷土愛の涵養を目的とする郷土教育へ移行したと捉えられる。

しかし、1934年の郷土科開設の公布以前から、附属地の公学校教師は郷土科教材の編纂に着手していた。教育研究部第二部の「学校及び個人の研究調査物」によれば、1931年7月12日、撫順公学校の岡村房義は『郷土教育と本校常識科の郷土化』という教材を編纂し、手段としての郷土化、目的としての郷土化、郷土の意義及び郷土教育の方法を記している。これらは1931年3月に公布された満鉄社告第104号で

発表された公学校における常識科の設置と関連して考えられている。公主嶺公学校に務めていた宮野入博愛は、1933年5月10日、懐徳県を地域範囲とする教材をまとめた『郷土地理』と、初級3年および初級4年を分けて公主嶺地域の特徴に適した『郷土科教授細目』という教材を編纂している⁽²⁴⁾。以上、岡村房義や宮野入博愛の教材の編纂は、郷土科開設直前の教材の開発である。

(2) 郷土科研究部の研究活動

満鉄教育研究会が1934年9月に発行した『満鉄教育たより』の創刊号では、初等教育研究会第二部（中国人教育）主任幹事挨拶の中に、一層の努力を要する内容として、「郷土科教授要目」の設定を挙げていたとある⁽²⁵⁾。この「郷土科教授要目」に関する研究活動について、1935年に発行した『満鉄教育たより』には、郷土科研究会が開いた委員会の内容が記されている。内容は表1の通りである。

表1からは、次のようなことがわかる。まず、郷土科研究部の研究時期は、1934年6月に郷土科が設置されてから1935年7月までに集中しているということである。その後の郷土科の研究事項について、『公学校の実際』によると、郷土科研究部は、満鉄沿線の各公学校の実情に適應させるため、郷土科の授業内容について、1935年3月に作成された「郷土科教授細目」をさらに研究し、1936年3月に「郷土科教授要目」を完成させた⁽²⁶⁾。

次に、郷土科打合会の第4項にある各校の郷土科教材配置表の内容について、以下の3点を指摘している⁽²⁷⁾。1点目は、各校の教材配分表について、研究部の教材をもとにそれを地方化し、類似した編纂を行っている点である。2点目は、教科書の中には日常生活に馴染ませる必要のないものもあるが、初級3、4年の児童の心情発達や児童生活に留意すれば、不都合はないという点である。3点目は、満洲のような移動の多い地方では愛郷心を育てるために教師たちがより熱心にその地方に合った郷土教育をしなければならないという点である。

表1 郷土科研究部の研究事項

※表の中の()は公学校の学校名を指している

| 会議 | 日付・場所 | 参加者 | 研究事項 |
|---------------------------------------------|---------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1回委員会 | 1934.6.23 撫順公学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・山田豊, 中村琢美 (撫順) ・宮野入博愛 (公主嶺) ・西本哲三 (新京) | 公学校郷土科教授細目作成の件協議 |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ①新京・公主嶺・撫順における三校の郷土科教授細目作成 ②三校の郷土科教授細目を基礎として沿線公学校に適用し得る教授細目を選定することに決定 |
| 第2回委員会 | 1934.11.2 撫順公学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・山田豊, 中村琢美 (撫順) ・宮野入博愛 (公主嶺) ・西本哲三 (新京) | 1. 公学校郷土科教材の選択 新京・公主嶺・撫順の三校より持寄りたる草案を基礎として次の各項を研究せり |
| | | | ①郷土科教授細目趣意書 |
| | | | ②初三初四の郷土科教材の選定 |
| | | | 2. 次回委員会までに以下の通り分担して郷土科教授細目を作成すること |
| | | | ①趣意書 (公主嶺公学校担任) |
| | | | ②初三郷土科教授細目 (撫順公学校担任) |
| ③初四郷土科教授細目 (新京公学校担任) | | | |
| 第3回委員会 | 1934.12.22 撫順公学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・山田豊, 中村琢美 (撫順) ・宮野入博愛 (公主嶺) ・西本哲三 (新京) | 1. 第二回委員会の分担事項の整理 |
| | | | ①公主嶺公学校にて分担せる公学校郷土科教授細目の再検討 |
| | | | ②撫順公学校にて分担せる初三郷土科教授細目の再検討 |
| | | | ③新京公学校の初四同上 |
| | | | 2. 以上の再検討を終りたる公学校郷土科教授細目は之を一括して発表に決す |
| 郷土科打合会 | 1935.7.8 奉天公学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・荒木 (奉天) ・山田 (撫順) ・古橋 (開原) ・飯塚 (蓋平) ・和田 (松樹) ・西本 (新京) ・佐藤 (四平街) ・市江 (鞍山) ・李 (熊岳城) ・劉 (瓦房店) ・孫 (昌図) | 1. 荒木主任幹事 開会の挨拶並当会開催の趣旨に就て |
| | | | 2. 山田研究部長より昨第度行事として郷土科教授細目編纂の経過大要説明 |
| | | | 3. 郷土科細目編纂趣意の検討 |
| | | | 4. 各校郷土科教材配当表及本科研究部教材配当表の検討 |
| | | | ①研究部教材を基とし地方化したるものにて大同小異 |
| | | | ②3, 4年の児童の心意発達及び児童生活に留意。 |
| | | | ③教師は満洲の児童の移動性の強い特徴に注意すべき。 |
| | | | 5. 郷土読本, 郷土学習帳についての研究 |
| 6. 本年度は各校に於いて更に実施研究をなすこと | | | |
| 7. 研究部に於いてはその郷土要目に尚不備の点あり, 更に各委員に於いて研究をなすこと | | | |
| 郷土科研究会 | 1935.7.9 撫順公学校 | <ul style="list-style-type: none"> ・山田豊, 中村琢美 (撫順) ・宮野入博愛 (公主嶺) ・西本哲三 (新京) | 1. 昭和9年度に於て完成せる公学校郷土科教授細目を再検討せり |
| | | | 2. 上記再検討せる郷土科教授細目は本年三月上旬草稿作成更に研究の上十月頃完成の予定 |

「満洲国」教育資料集成Ⅱ期, 『満鉄教育たより』第1巻第8号, 1935年4月, エムティ出版, 5頁; 第1巻第12号, 1935年8月, 11頁; 第1巻第14号, 1935年10月, 14頁により筆者作成

1934年6月から1935年7月までの郷土科研究科での検討内容を見ると、次の2つことがわかる。1つ目は、郷土科の教材が児童の心の発達と実生活に重点を置いているということである。2つ目は、満洲に住む児童の移動が非常に多い点が公学校の郷土教育実施に困難をもたらしているということである。この点に関連して、南満洲鉄道のような交通網の発達にともない、満鉄附属地が移住生活の拠点であったことが関係していると考えられる。つまり、人口の地域的移動が多いことにより、家族とともに子どもも移動する。このような特徴のために、満鉄の教育関係者は郷土科の教材を各地の状況に合わせたものにする、すなわち先に述べた教育の郷土化を重視したのである。

郷土科の授業で使用された教科書である『郷土読本』については、現物は発見されていないが、実際のされていたことは次の記録によりわかる。1935年5月に附属地の開原公学校において、初級3、4年の学年のそれぞれに適した『郷土読本』が編纂されていた。洮南扶輪小学校⁽²⁸⁾の教員だった花潤霖は、1935年9月に実習生として開原公学校を見学した。花潤霖は開原公学校が、算数、日本語、郷土科の三科を重視していたことを記録している。そして「貴校（開原公学校－筆者）が郷土教材を1部もらいうけることを希望し、弊校（洮南扶輪小学校－筆者）が将来この科を添授する参考とすること」としている⁽²⁹⁾。これは一例に過ぎないが、1936年に「郷土科教授要目」が完成する前に、すでに一部の附属地の公学校に郷土科が開設され、学校の教授でも自校で編纂した『郷土読本』が用いられていたのである。このように、公学校の教師たちが自主的に行っていた郷土科の活動は、満鉄による公学校への郷土科設置につながったと推測される。

次に、「郷土科教授要目」の内容と特徴を分析していく。

3. 「郷土科教授要目」の内容と特徴

郷土科研究会が作成した「郷土科教授要目」の内容は表2の通りである。

表2の内容からわかるように、郷土科で扱う郷土の範囲は児童の学校から始まり、児童の周辺へ、さらに市町村・県・省へと広がり、最終的には満洲国へと広がっていった。つまり、それまでの常識科とは異なり、郷土の範囲は単に子どもが暮らす身近な場所ではなく、満洲国に拡大していったのである。ここでは、満鉄教育関係者の郷土に対する理解がうかがえる。つまり、子どもたちの生活の場である郷土が満洲国へとなったのである。

次に「郷土科教授要目」の内容を分析するために、『公学校・日語学堂の実際』にみえる分類により、5つのカテゴリーに分けて検討する⁽³⁰⁾。第1に、地理に関する事項である。第2に、歴史に関する事項である。第3に、自然に関する事項である。第4に、個人衛生及び公共衛生に関する事項である。第5に、県公署などの公共施設や共同生活に関する事項である。

まず第1の地理の教授範囲については、児童生徒の生活する地域である学校から始まり、徐々に学校の近く、さらには県や満洲国にまで広がっていった。学習内容として、郷土の実地観察や郷土の体験活動に重点を置いている。例えば学校での観察、郷土遠足の途中での観察採集、近隣の市街地および郷土模型の作成などがある。このように、郷土の自然や人文社会に関するものを児童自身が直接的に観察することで、自分自身の感覚と生活をつなげようとしたことがうかがえる。

第2の歴史に関する内容では、郷土の伝説や民謡に関する内容に注目したい。まず郷土の伝説について、以下2つのことが考えられる。①民間伝説は、それに固有の口承性や集団性などの特徴を持って、民衆が彼らについての地域集団としての共通の歴史的記憶を表している。その意味で伝説は、集団社会が過去の歴史を記憶するための手段の一つとされたのである。②郷土の伝説には、地域の人々の世界観や道徳観、社会的理想などが内在している。人々の間での

表2 「郷土科教授要目」の内容（初等3年，4年）

| 初等 第3学年（1時間/週） | | |
|----------------|---------|-----------------------------------------------------------------|
| No. | 学習主題 | 学習内容 |
| 1 | 私共の学校 | ①学年始の希望下覚悟，②学校の児童数，学級数，教室数，教師数，学校の大きさ，③学校園，動物の飼育状況，④沿革，⑤学校愛護と規律 |
| 2 | 郷土遠足 | ①郷土の直観認識，②途中の観察採集，③地図の見方 |
| 3 | お祭り | ①神社廟の参拝，②郷土の神社廟及其のゆはれ（いわれ）③お祭りにおける行事の調査 |
| 4 | 附近の動植物 | ①附近の動植物採集，②採集した動植物の観察整理，③飼育又は栽培による継続観察 |
| 5 | 郷土の誉 | ①郷土の名所旧跡，②郷土の名産，③郷土の人物 |
| 6 | 附近の石ころ | ①課外採集，②採集物の名称及主なる用途，③蒐集物利用の箱庭作成 |
| 7 | 野菜市場 | ①取引状況，②主なる野菜の名称，③時価，④産地販路 |
| 8 | 町の眺め | ①高处より地形，地勢等の観察，②郷土眺望を地図上に整理，③郷土の主なる機関，④郷土模型 |
| 9 | 附近の動植物 | ①附近の動植物採集，②採集物の観察整理，③飼育又は栽培による継続観察，④郷土の紅葉と落葉 |
| 10 | 郷土見学 | ①郷土の諸官工場等の内容，②名所旧跡の調査，③見学箇所の仕事と内容調査，④見学表作成 |
| 11 | 郷土の民謡 | ①郷土の民謡，童謡の蒐集，②民謡集作成 |
| 12 | 特殊教材 | 郷土における特殊たる事物 |
| 13 | お正月 | ①年末年始の行事，②お正月の儀式と作法 |
| 14 | 私共の県 | ①県公署の所在地，②県長，③県公署の仕事，④県の大き，人口，⑤県の歴史と産業，⑥見取図，調査表の作成 |
| 15 | 満洲国 | ①満洲国位置地勢，②国境と各省区分，③主なる都市，④吾が省，⑤満洲国地図作成 |
| 初等 第4学年（1時間/週） | | |
| No. | 学習主題 | 学習内容 |
| 1 | 樹の暦 | 郷土における樹の一年間の継続観察 |
| 2 | 町の歴史 | 郷土市街開発沿革 |
| 3 | 郷土見学 | ①油房，工場，市場，其他諸期間，②名所旧跡の調査，③見学表作成 |
| 4 | 年中行事 | 端午節の由来，②端午節の行事，③端午節の教室作業化 |
| 5 | 物価調べ | ①調査事項：肉，魚，大豆，高粱，その他；呉服類 ②物価表作成（各地物価比較） |
| 6 | 夏の衛生 | ①郷土における伝染病，②公衆衛生：蠅，蚊，蚤，其他；白癬；清潔デー，③予防と注射 |
| 7 | 動植物採集 | ①珍しい草花の観察，②薬草，毒草，茸，③珍しい虫類の観察，④益虫，害虫 |
| 8 | 郷土展覧会 | ①蒐集の展覧会，②郷土書帳の展覧 |
| 9 | 年中行事 | ①孔子の人格と産業，②孔子祭，③満洲国と孔子 |
| 10 | 年中行事 | ①仲秋節の行事，②仲秋の月 |
| 11 | 郷土の俚言 | ①郷土の俚言蒐集，②俚言集作成 |
| 12 | 渡り鳥 | ①郷土の渡鳥の移動，②移動と気温食物の関係，③郷土の鳥類の調査 |
| 13 | 樹の暦（整理） | 四，五，九，十，十一の四カ月に互る継続観察の整理 |
| 14 | 特殊教材 | 郷土における特殊事物 |
| 15 | 郷土伝説 | ①郷土の伝説蒐集，②伝説集作成 |
| 16 | 冬の衛生 | ①戸外運動，②暖房と換気③掃除と衛生，④結核予防 |
| 17 | 年中行事 | ①学校の主なる行事，②郷土の主なる行事，③学校及郷土の行事表作成 |
| 18 | 郷土模型 | ①今迄の調査事項の模型化，②附近の地勢市街，③主なる建物，道路公園，橋など |
| 19 | 満洲国 | ①満洲国の位置，②地勢，国境，③面積，人口，④気候，⑤産業，⑥交通，⑦政治，⑧建国と日満関係，⑨満洲国地図 |

南満洲鉄道株式会社初等教育研究会第二部編「公学校・日語学堂の実際」，1937年，45～49頁により筆者作成

口語伝承によって、個人の価値観を道徳化してきている。それによって、郷土共同体の維持や社会秩序の安定に役立てることができると考えられる。郷土の民謡が取り上げられたことについては、1925年12月の『南満教育』の中で、長春公学校長であった稲川浅二郎が書いた文章が参考になる。「支那民謡に就て(一)」の中で「民謡には其の民族の性情や風俗が最もよく現れて」おり、「支那の民謡も支那研究の一端」とする⁽³¹⁾。また、満洲事情案内所が編纂した『満洲の伝説と民謡』では「民情風習を究め、伝説を知ることは、その国の文化や、歴史や、国民性の生きた理解の上に最も重要欠くことの出来ない事柄である」と記している⁽³²⁾。ここから、満鉄の教育関係者は民謡の芸術性の研究ではなく、民謡の内容に着目していたことがわかる。民謡を通して、その土地の歴史や文化、社会が抱える国民生活の現状、国民性の特徴などを理解することができる。この点について、例えば「支那民謡に就て(二)」では、民謡に反映された家族の問題を挙げている。「女は何のために生まれたか」や「婚家における彼女の女」などの家族社会に関する民謡がある⁽³³⁾。稲川は「家族主義」が民謡の特徴だと指摘している。そして『満洲の伝説と民謡』の中で、家庭生活に関する民謡にも「満人の家庭は一般に大家族主義の伝統生活を守られている」と書く⁽³⁴⁾。ここでの家族は中国郷土社会の基本的なコミュニティで、政治・経済・宗教などの機能は家族を利用することができる。家族間の親睦・安定は、社会の中の基礎的な共同体を安定させ、児童が郷土の民謡を通して民族文化や風俗、国民性の特徴を理解することができる。

第3は自然に関する事項である。動植物の観察、草花や樹木の栽培、郷土の鳥類の調査や虫の観察などが含まれている。身近な郷土の内容を取り入れることで、子どもの学びを自然な形で進め、探究心を刺激する。そして、子どもの興味や関心は学習意欲をふくらませ、郷土に関する知識の習得を進めていくことが推測される。

第4に、個人衛生及び公共衛生に関する事項

である。例えば、夏に出やすいハエや蚊などの公衆衛生、冬の野外運動、掃除、結核の予防などが挙げられる。公学校の衛生に関する活動では、1930年7月、奉天公学校で公学校の衛生に関する討論会が開かれた。結膜炎にかかった児童にどのように対処するのかという問題に対し、教室の換気や衛生婦の派遣などの対策がある。これを郷土科の学習内容とすると「郷土科教授要目」が公学校児童の実情に合わせて定められていることがうかがえる。

第5に、県公署などの公共施設や共同生活に関する事項である。ここでは初等4年の年中行事中の孔子祭、満洲国と孔子および端午節等を例にする。孔子祭が学ばれる要因として、以下の3点が考えられる。1点目は、満洲国の為政者が孔子祭という伝統的な祭儀によって新国家のイデオロギーの統一を実現しようということである。建国当時、国民思想の統一と宣撫工作が建国当初の急務となった。この満洲地域は、日本の植民地主義、中華民国の三民主義など国家の統治イデオロギーが混在しており、東三省地方での多民族の様相も相まって、国民の活動支配は困難になっていた。そのため、満洲国の為政者は「満洲国国民をはじめとする東アジア諸民族の民情心理に合致し、風俗習慣にも適合した」儒教を統治理念とすることを考えた⁽³⁵⁾。つまり、瀰漫性宗教⁽³⁶⁾(diffused religion)に従属していた儒教は、東アジアの諸民族の精神的特質と合致していた。そのために満洲の孔子祭は、為政者の統治道具として世俗的な制度や社会秩序の整備に重要なものと考えられた。2点目は、日本には古くから儒教を重視する基盤があり、満洲国の為政者はそれを自己流に活用していたということである。江戸時代の1690年、徳川將軍綱吉が湯島聖堂を創建し、孔子をはじめとする中国の先聖先師が祭られた。孔子廟は満洲国の統治者、すなわち日本人にとっても馴染みのあるものであった。3点目は、清朝時代の東三省の学校では、孔子祭が行なわれていたという事実がある。東三省の民俗資料によれば、黒竜江省の青岡県と拝泉県では、孔子の誕生日になると、教員と生徒が線香をあげて奉

ることを行なうことがあった⁽³⁷⁾。このような土台のうえで、満洲国建国後の孔子祭はより実施しやすくなった。これに関連して、『満洲国史(各論)』によると、1944年時点での満洲国には合計88もの孔子廟があり、そのうち75は建国前に建てられたものである⁽³⁸⁾。孔子廟への参拝は、満洲国建国以前より伝統的な行事として存在していた。

それでは、孔子祭は満洲国においてどのように行われていたのか。1932年8月23日、満洲国文教部は各省区に「孔子秋祭舉行辦法」の指令を出した。指令には「孔子廟の整備・修復、孔子祭の実施、学校教育における孔子思想の教授を通達」などが記されている⁽³⁹⁾。首都の新京をはじめ各地で秋に行われる孔子祭の準備のために、孔子廟の修繕に着手し、孔子祭のパンフレットを作った。また、同月の文教部は「祀孔参考」を編纂して祀孔の儀式規定を具体的に説明した。『盛京時報』では、同年の9月3日に新京で行われた孔子祭を報じていた⁽⁴⁰⁾。さらに、1933年出版された『文教月刊』では、「今後は春秋の例祭を中央・地方ともに厳粛に国家の行事として行なうことにする」と明記している⁽⁴¹⁾。このように、満洲国が建国後まもなく儒教思想への崇敬を強めるような教育を実施していたことがうかがえる。さらに、孔子生誕の日になると各種の記念行事が行われ、全国的に休日となった。満洲国では王道を建国の精神としており、王道は孔子が提唱した儒教に由来するため、孔子祭を国祭としたのである⁽⁴²⁾。

以上のように、孔子祭は前代からのものであり、満洲国での中国人児童に対する郷土教育は、封建的な儒教の礼教道徳を利用したものであった。「満洲国と孔子」の関係については、満洲国の建国理念より追究することができよう。1932年3月、満洲国政府により発表された「満洲国建国宣言」では、「教育の普及は当に礼教を崇ぶべし、王道主義を實行して必ず境內一切の民族をして熙々皓々として春台に登るが如くならしめ」とある⁽⁴³⁾。「王道主義」は、満洲国建国の根本理念である「五族協和」と並び、建国国是とされている。同年3月25日、

満洲国國務院令第2号では「各学校では礼教を崇めるために、差し当たり、四書・五經を使うこと、党義に関する教科書は全て廃止すること」と命令している⁽⁴⁴⁾。満洲国は、儒教思想から生み出された「王道主義」に基づく教育の普及を目指していたのである。

また、第5の内容として、アジア文化圏を代表する端午節や中秋節の伝統的な行事の内容もある。郷土科教材及び取扱上の注意事項には、「祝祭日、民間行事、民謡等郷土人ノ一致行動ニ関スル事項」とある⁽⁴⁵⁾。満洲は幅広く移民を受け入れていた地域であり、郷土を離れて移住した人びとにとってこのような年中行事は心身や精神的な癒しを提供していた。共同で行うことで、家族や村の人々の精神的なつながりを生み、共同体意識をつくりだす。

最後に、「郷土科教授要目」で目を引いたのは、初等3年の「お祭り」という学習主題である。「孔子廟」に対応する形で「神社廟の参拝」について書かれていることである。周知のとおり、神社は日本人にとって心を寄せる共通の場であり、共同体の精神的紐帯でもある。1932年までの満洲で建立された神社の数は38社で、その約8割が満鉄附属地神社であった。天照大神を祀る神社の比率は90%であり、明治天皇を祀る神社の比率は38%である⁽⁴⁶⁾。孔子廟と神社はどのような関係にあるのか。孔子廟と並行して、神社を参拝させる理由として、中国人児童に孔子を通じての郷土の伝統文化理解をすると同時に、日本文化の価値観に中国人児童を引き込もうとする意図が表れていたことを指摘することができる。『満洲国史(各論)』では、「日系以外の他民族に対しては「崇敬者」として扱ったが「日満一徳一心」の精神を理解するに及び満系市民の参拝もふえつつあった」と記している⁽⁴⁷⁾。神社に天皇制イデオロギーを担わせることで、満洲の教育関係者は中国人児童の教育に取り込もうとしたと思われる。

満洲国が成立してからは、文化・経済・政治などの様々な側面で前時代とは根本的に変わっていた。中国従来の伝統が通用しなくなっていく時代だった。先に述べた孔子祭のような伝統

的な行事は、確かに歴史的に辻褃の合う過去と連続性の上に構築されているが、神社やと並行して述べられるように前時代から継承されたものではない。イギリスの歴史家ホブズボームによれば「伝統の創出と見なされているものは、単に反復を課すことによってということかもしれないが、過去を参照することによって特徴づけられる形式化と儀礼化の過程のこと」である⁽⁴⁸⁾。こうして「創られてきた」伝統は、社会化の形成期にある児童にとって、アイデンティティやネーションの帰属にかかわる問題である。満洲国初期の占領下で実施された郷土教育は、満洲の旧来の伝統的な行事として形骸化した。しかし、それを教育手段とし利用し、満洲国という新しい「国」の地域共同体の一員としての郷土意識を中国人児童に植え付けることが意図されたのである。

おわりに

本研究は、満洲国成立前後に教育の郷土化という郷土教育の考えが提起されたことを受けて、満鉄附属地における公学校の「郷土科教授要目」の内容を分析することで、公学校の郷土科の内容と特徴を明らかにした。結論を以下の2つに整理することができる。

第一に、郷土科の内容が、中国人児童の郷土愛を育てることに重点が置かれていることがわかった。満洲国の成立と共に教育の郷土化を求める声が起こる中で、郷土科が附属地の公学校に登場した。満洲における教育の郷土化は、満洲の特殊な自然や人文環境を根底にした、児童の移動が多いという実情に基づいて行われた郷土教育である。このような教育主張の中で、公学校の教師たちが各校の「郷土読本」や「郷土科教授要目」の編纂に自主的に関与した。そうしたことも公学校での郷土科という、郷土を教授する教科開設の道を開いた。郷土科の内容とそれ以前の常識科の内容を比較してみると、郷土科の内容は中国人児童の郷土愛を育てることに重点が置かれていることがわかった。

第二に、「郷土科教授要目」の内容を分析することで、次のような特徴をまとめたことであ

る。郷土の範囲は学校から県・省、さらには満洲国にまで拡大されたことである。郷土科の学ぶ内容は、郷土を直観的に教える手段とし、郷土の物事に対する直観的な学びに加え、児童が実際に参加する体験活動も重視している。一方、郷土科は独立教科として、郷土の自然や人文社会の内容を取り上げている。さらに注目すべき点は、傀儡政権下で行なわれた教育であるがゆえに、満洲の郷土民謡・伝説や年中行事など中国伝統文化の特色を帯びたものが利用されていたことである。中国人児童に向けて郷土教育の実施の過程で、急速に建国された満洲国は、儒教的理念にもとづく独立「国家」の体裁をとるなかで、支配者である皇道国家日本との関係を理念的に整合ししなければならないという文化摩擦の問題を生じた。これは郷土観念の付与の例として、満洲国の教育関係者が地域の伝統文化を利用して満洲国という地域共同体の一員としての郷土意識を児童に植え付けることを意図していたことを示している。

本稿では、主に附属地の中国人児童が学ぶ公学校での教育の郷土化について検討したが、満洲国成立後の附属地外での郷土教育の考察については今後の課題とする。

注

- (1) 海後宗臣・飯田晁三・伏見猛彌「我が國に於ける郷土教育の発達」『教育思潮研究』第六巻第一輯、目黒書店、1931年、214頁。
- (2) 小澤恒一「教育の郷土化」初等教育研究会『教育研究』（「郷土化教育」特集）、1931年、34頁。
- (3) 槻木瑞生「満洲教育史概略—その土地に生きた人の視点から—」、『News letter』(24)、近現代東北アジア地域史研究会、2012年、1～12頁。
- (4) 槻木瑞生「アジアの文化・技術の流れの中の満洲教育史—日本の「国民教育」と「新教育」—」、『日本植民地・占領地教科書と「新教育」に関する総合的研究～学校教育と社会教育から』第1巻、2013年、17～30頁。
- (5) 王永江「遼陽州郷土志序文(二)」柳成棟、

- 宋抵『東北方誌序跋輯編録』哈爾濱工業大学出版社, 1993年, 221頁。
- (6) 邵俊文(筆者), 佐藤巽(訳)「満鉄公学堂教育改革に関する私見」『南満教育』第105号, 1931年6月, 44頁。
- (7) 同上書, 52～53頁。
- (8) 中華民国教育部『中小学課程暫行標準第一冊 幼稚園及小学之部』, 1928年, 27頁。
- (9) 前掲「満鉄公学堂教育改革に関する私見」, 55頁。
- (10) 荒木は, 1888年7月に生まれ, 出身は福井県である。福井県下の各小学校訓導, 1918年開原公学校教諭を経て, 満鉄教育研究所に就職した。また, 1932年12月に出版された『南満教育』の中で, 撫順公学校の生徒が書いた「荒木校長を送って」によると, 荒木は1922年に撫順公学堂長に就職していた。満洲国建国後, 荒木は撫順公学校を退職し奉天公学校に転職した。その後, 奉天省立奉天第二国民高等学校校長兼奉天第八国民高等学校校長, 満洲国民生部教育司の教育監を兼任した。中西利八『満洲紳士録』第3版, 満蒙資料協会, 1940年, 454頁。
- (11) 荒木馨「新興満洲教育の真の根柢に就いて」『南満教育』第115号, 1932年4月, 14頁。
- (12) 同上書, 15頁。
- (13) 同上書, 14頁。
- (14) 同上書, 15頁。
- (15) 加藤嘉雄「公学校教育に於けるカリキュラムに関する小考察」『南満教育』第126号, 1933年4月, 12頁。
- (16) 同上書, 13頁。
- (17) 同上書, 14頁。
- (18) 同上書, 17頁。
- (19) 同上書, 14頁。
- (20) 南満洲鉄道株式会社「南満洲鉄道株式会社社報」(第8136号), 1934年6月, 105頁。
- (21) 「満洲国」教育資料集成Ⅱ期『満鉄教育たより』, 第1巻(創刊号), 1934年, エムティ出版, 1頁。
- (22) 南満洲鉄道株式会社初等教育研究会第二部編『公学校・日語学堂の実際』, 1937年, 8頁。
- (23) 同上書, 44頁。
- (24) 同上書, 130～131頁。
- (25) 前掲『満鉄教育たより』, 26頁。
- (26) 前掲『公学校・日語学堂の実際』, 130頁。
- (27) 「満洲国」教育資料集成Ⅱ期『満鉄たより』, 第1巻第12号, 1935年, エムティ出版, 11頁。
- (28) 洮南扶輪小学校は, 1926年12月6日に創立され, 1934年4月に洮南鉄路局の管轄となった。鉄道局も満鉄会社の管轄であった。小学校では, 鉄道局に所属する児童の割合は85パーセント, 鉄道局外を占める児童の割合は15パーセントとなる。鉄路総局総務処文書課『統計年報』(附業編), 鉄路総局, 1935年, 13～14頁。
- (29) 花潤霖「教育通信」『奉天教育』第3巻第8号, 1935年, 112～116頁。
- (30) 前掲『公学校・日語学堂の実際』, 45頁。
- (31) 稲川浅二郎「支那民謡に就て(一)」『南満教育』第55号, 1925年12月, 44頁。
- (32) 満洲事情案内所『満洲の伝説と民謡』, 慧文社, 2007年, 5頁。本書は, 1936年11月に発行された『満洲の伝説と民謡』(満洲事情案内所編)を底本とするものである。
- (33) 前掲「支那民謡に就て(一)」, 45頁。
- (34) 前掲『満洲の伝説と民謡』, 89頁。
- (35) 満洲国史編纂刊行会『満洲国史(各論)』, 満蒙同胞援護会, 1971年, 1109頁。
- (36) アメリカの社会学者C. K. Yangによると, 瀰漫性宗教(diffused religion)は神学的な理論や崇拜の対象と信仰者を持っているので, 複数の世俗的な制度に容易に浸透することができ, それによって世俗的な制度の観念・儀式および構造の一部になる。このような宗教は民衆を支える力とし, 世俗の制度や社会全体の秩序にとって重要なのである。C. K. Yang. (1961) *Religion in Chinese society: a study of contemporary social functions of religion and some of their historical factors*, Berkeley: Univ. of California Press, pp.294-295.
- (37) 吉林師範院古籍研究所『東北民俗資料荟萃』, 吉林文史出版社出版, 1992年, 114～115頁。
- (38) 前掲『満洲国史(各論)』, 1110頁。
- (39) 「1. 宗教関係(7)孔子祭及孔子廟修理ニ関スル件 自昭和五年七月～昭和八年十月」JACAR

- (アジア歴史資料センター) Ref.B05016188600
(第9画像), 参考資料関係雑件／宗教, 病院,
図書館, 博覧会, 教会関係 第一巻 (H-7-2-0-
4_3_001) (外務省外交史料館)
- (40) 「新京預定祀孔禮節」『盛京時報』, 第8160号
(第5版), 1932年8月27日。
- (41) 「満洲国之文教」『文教月刊』第3号, 文教部,
1933年, 26頁。
- (42) 満洲日日新聞社『満洲年鑑』, 満洲日日新聞
社, 1939年, 385頁。
- (43) 文教部学務司総務科『満洲国学事要覧』, 文
教部学務司, 1936年, 4頁。
- (44) 「令学校教授経書」『盛京時報』, 第8004号 (第
6版), 1932年5月6日。
- (45) 前掲『公学校・日語学堂の実際』, 45頁。
- (46) 津田良樹・中島三千男・堀内寛晃ほか「旧
満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査からみた
神社の様相」, 『人類文化研究のための非文字資
料の体系化』04, 2007年, 210頁。「満鉄附属地
神社」一覧により計算された。
- (47) 前掲『満洲国史 (各論)』, 1117頁。
- (48) エリック ホブズボウム・テレンス レンジャー
他『創られた伝統』, 紀伊國屋書店, 1992年,
13頁。

Educational Localization of Public Schools in Affiliated Areas of the Manchuria Railway Before and After Establishment of Manchukuo: Focusing on Content and Characteristics of the Local Education Curriculum

Song TING

The purpose of this paper is to state the content and characteristics of local education by analyzing the content of the local education curriculum in local public schools of the affiliated areas.

The conclusion of the study can be summarized into the following two points. The first point is about the local education. The so-called localization of education refers to the implementation of local education based on the special natural and cultural environment of Manchuria as well as the actual situation of children's strong mobility. In such educational propositions, teachers from public schools actively participated in the compilation of the Textbooks of the Local Education Curriculum and the Essentials of the Local Education Curriculum, which to some extent promoted the establishment of the local education curriculum. In comparing the content of the local education curriculum with that of a common sense curriculum shows that the content of the local education curriculum focuses more on cultivating Chinese children's emotions towards local culture.

The second point is about the characteristics of the local education curriculum. As an independent subject, the local education curriculum encompassed the natural, cultural, and social aspects of local areas. It is worth noting that it was precisely because education was carried out in Manchukuo that educational staff utilized Manchuria's local folk songs, legends, and festivals with traditional Chinese cultural characteristics. In the process of implementing local education for Chinese children, the rapidly established Manchukuo, in the form of an independent "state" based on Confucianism, had to consider its relationship with Japan, resulting in cultural friction. Educational staff in Manchukuo utilized regional traditional culture to instill in children a sense of being a member of the regional community.